

テハ構文の二つの解釈について

有 田 節 子

キーワード：条件文、否定的含意、反復性、テハ、ハ

要 旨

本稿はテハ構文の持つ二つの解釈(条件的/反復的)がテハ構文の構造と意味の相互作用から導出されることを示す。

条件的テハはいわゆるB類の副詞節と同様の統語的ふるまいを示すのに対し、反復的テハはA類の副詞節、すなわち動詞句レベルの修飾句と同様にふるまう。この統語的レベルの違いはテ節においても観察される。さらに、条件的テハにおけるハのスコープと反復的テハにおけるハのスコープは、後者が主節の述語句にも及ぶという点で違いが見られる。

テハをめぐるさまざまな現象が、ハの意味、テハ構文におけるハのスコープの違い、さらにテ節の統語的、意味的性質から合成的に導かれることを示していく。

1 はじめに

本稿が対象とするのは、述語のいわゆるタ系連用形(益岡・田窪1992、以後「テ形」と呼ぶ)に提題助詞ハが接続した複合形式を伴う構文(以後「テハ構文」と呼ぶ)である。テハという形式自体は以下のようにさまざまな環境で用いられる。

- (1) 友達を裏切っては信用されなくなる。
- (2) 友達を裏切っては捨てた。
- (3) 老いては子に従え。
- (4) カバンを持っては帰らなかった。
- (5) 税金の支払いに関しては、まず税理士にご相談を。
- (6) そんなことを考えてはいない。
- (7) もっと真剣に考えなくてはならない。

この中で本稿が対象とするのは、日本語の話者が直観的にテハを一語として認める(1)のような条件的解釈になる用法(以後「条件的用法」と呼ぶ)と、(2)のような反復的解釈になる用法(以後「非条件的用法」と呼ぶ)である。その他の(3)は文語的で、口語ではむしろ「てからは」で表現されるという点で考察の対象外にする。(4)はハが否定辞「ない」の焦点のマーカ―として分析されるもので、テハが一語に認定されているとはいえない。また、(5)についても、以下に見るように、ハを「さえ」「だけ」などの取り立て助詞に置き換え

(42) テハ構文の二つの解釈について

ることが可能で、その場合もテの表す意味は変わらないことから、テとハを分けて捉えていると言える。

(5) 税金の支払いに関して(さえ/だけ)、まず税理士にご相談を。

さらに、(6)と(7)は、それぞれ「てはいない」「なくてはならない」という表現の一部分として捉えられるという理由で、本稿の直接の分析対象からは外すことにする。

2 現象

テハには(1)のような条件的用法があるが、それにはテハ節に表されている出来事が起こるのを回避しようとする含意(「否定的含意」)があることが従来の研究(蓮沼1987など)で指摘されている。しかしながら、テハの条件的用法のすべてが否定的な含意を持つわけではない(現象A)。

(8) あなたのよう美しい方に頼まれては悪い気はしない。

(9) こんなに夕焼けが美しくては、明日もいいお天気だろう。(川端1958)

さらに、テハの持つ否定的含意は、テハ以外の形式も持つことがある(現象B)。

(10) 君は行くべきではない。君が行ったらみんなが迷惑する。

(11) そんなことをすると、お父さんに叱られるよ。

以上の現象A、Bから、否定的含意をテハの条件的用法の本質的な意味と考えるのには問題があると言える。

また、テハには、(2)にあげたように単なる事態の反復を表す用法もあるが、テハの非条件的用法は常に反復を表すわけではない(現象C)。

(12) 受付嬢の所へ行っては迷子のふりをしてからかい、親に手を引っ張られて館内を歩いている同年代の子供を片っ端からバカにしまくった。エレベーターに乗っては、各階のボタンを押し、陳列されている高級なシルクのドレスで鼻水をふいた。(辻 仁成『カイのおもちゃ箱』)

(13) 投げては脱三振りリーグ最高記録、打っては10試合連続安打、期待の新人の登場です。

さらに、反復的解釈を持つテハの非条件的用法が普遍的な解釈を持つことはない(現象D)。ここで普遍的解釈を持つ文と呼ぶのは、(14)や(15)のような文のことである。この文において「大切にする」、「裏切る」という行為の主体は、特定の誰かではなく、「人という種」あるいは「一般人」になる。また、「友達」という名詞句の解釈も特定の誰かではなく「一般に友達」である。

(14) 友達は大切にすべきだ。

(15) 友達を裏切るものではない。

一方(16)、(17)の非条件的テハ文においては、いずれの文も「裏切って捨てる」行為の主体は特定の人であり、「友達」も「一般に友達」のような解釈ではない。非条件的用法のテハは習慣的事態を表すことはあっても、それが普遍的事態に移行することはない。

(16) 友達を裏切っては捨てた。

(17) 友達を裏切っては捨てる。ひどいやつだ。^{注1}

3 先行研究の問題点と本稿の立場

否定的含意を持つテハを中心に分析する研究(蓮沼 1987, Akatsuka & Sohn 1994 など)では、上記の現象 A を十分に説明できない。否定的含意を持たない条件の用法のテハを考察対象に含んだ研究(塩入 1993 など)でも、条件の/非条件の用法の関係を捉えることができない。二つの用法の関係について分析した研究(田中 1985, 森田・松木 1989 など)においても、恒常条件を介在させて二つを連続的に捉えようとしているので、上記現象 D が問題になる。

このように、テハに関するこれまでの研究は、テハの諸特徴について部分的に説明できても、網羅的には説明できていない。先行研究が諸現象を必ずしも説明できていないのは、二つの用法の意味的統語的位置づけが十分になされていないことにある。本稿はテハ構文とテ形構文の構造的平行性、テハ構文と X ハ Y 構文の意味的共通性を明らかにすることにより、テハ構文の諸現象を説明する。

4 テハ構文の構造的二類型

この節では、いくつかの統語的テストを通してテハ構文の構造的性質を観察し、テハ構文の二つの用法が構造的にも区別されることを示す。

4.1 取り立て詞のスコープと副詞節の付加位置

初めに、取り立て詞モを用いたテストをとりあげる。^{注2}

- (18) a 清美がリングを食べた。
b 清美がリングを食べもした。

(18)b には(18)a にはない含みがあり、その含みには次の三つの可能性がある。一つは清美がリング以外にもいろいろ食べた、というもの。二つめは清美がリングを食べる以外にも切り刻んだり絵に描いたりなどをした、というもの。三つめは清美がリングを食べる以外にもジュースを飲んだりテレビを見たりなどをした、というものである。この三通りの含みはモが付加されたことにより生まれることから、モの含意だと言える。

モが表層的には「食べ」という動詞に付加しているにも関わらず、「食べる」の目的語に関する含意(「他のものも食べた」)もあるし、また「りんごを食べる」という行為に関する含意(「ジュースを飲んだり、テレビを見たりした」)もある。つまり、モが作用する領域(スコープ)は直接付加している動詞だけでなくその動詞句全体に及ぶ。これを便宜的に(19)のように表示しておこう。^{注3}

- (19) 清美が [x_{NP} [v_P リングを食べ] も] した

次に、モと副詞節の関係を見てみよう。いわゆる A 類の副詞節だとされているナガラ節と、いわゆる B 類の副詞節(南 1974, 1992)だとされているレバ節について比較する。

- (20) a 我が子の目を見つめながら泣いた。

(44) テハ構文の二つの解釈について

b 我が子の目を見つめながら泣きもした。

(21) a 清美は父親に叱られれば泣く。

b 清美は父親に叱られれば泣きもする。

ナガラ節を持つ(20)bは、「我が子の目を見つめながらも泣いたが、将来のことも考えながらなど他のことをしながらも泣いた」というような含意、「我が子の目を見つめながら泣いたし、また、腹を立てるなど、他のこともした」というような含意、そして「我が子の目を見つめながら泣いたし、将来のことを考えながらため息をつくなど、他のこともした」というような含意の、三つの可能性がある。これは、「我が子の目を見つめながら」の部分が「泣き」同様モのスコープ内にあることによって出てくる含意である。

それに対し(21)bは、「父親に叱られれば、泣くだけでなく、すねたり、怒るなど、他のこともする」、という含意はあるものの、「父親に叱られる以外のこと、たとえば、困ったことがおこったときにも泣く」というような含意はない。つまり、「父親に叱られれば」の部分にはモの影響をうけておらず、モのスコープには入らないと言える。これを便宜的に以下のように示しておこう。

(22) [_{XP} [_{VP} 我が子の目を見ながら泣き] も] した。

(23) 清美は父親に叱られれば [_{XP} [_{VP} 泣き] も] する。

4.2 モのスコープとテハ節

テハ節はナガラ節、レバ節のどちらと同じふるまいを見せるのだろうか。

(24) a 清美は書類の束を破っては放り投げた。(非条件的)

b 清美は書類の束を破っては放り投げもした。

(25) a 大事な仕事をさぼっては、リストラされる。(条件的)

b 大事な仕事をさぼっては、リストラされもする。

(24)bの方には、「書類の束を破って、それを放り投げる以外にも、踏んだり、くちゃくちゃにしたりした」というような含意、「書類を破る以外に、書類を折り曲げたり、バラバラにしたりして、放り投げた」というような含意、そして「書類を破って放り投げる以外に、その場に泣き崩れたり、大声をあげたりした」、というような含意がある。一方、(25)bには、「大事な仕事をさぼって、賃金カットされるだけでなく、降格されたり、リストラもされる」というような含意はあるが、「大事な仕事をさぼる」という部分に含意はない。

このように、非条件的用法のテハ文は、テハ節がモのスコープにふくまれる場合に生じる含意があるという点で、A類の副詞節のナガラ節を含む文と同様のふるまいを見せる。一方、条件的用法のテハ文は、そのような含意を持たないという点で、B類の副詞節であるレバ節を含む文と同じである。したがって、テハの非条件的用法と条件的用法が構造的にも区別されることが予想される。

4.3 主語、アスペクト要素

よく知られているように、いわゆるA類の副詞節には主節とは異なる動作主語は現れな

いのに対し、B類の副詞節には現れる。

(26) *私は息子がテレビを見ながらごはんを食べた。

(27) 私は息子が文句を言えば大学を休むつもりだ。

(26)に見るように、A類のナガラ節は主節の主語(この場合「私」)と異なる主語(この場合「息子」)をとると不適格な文になってしまう。それに対し(27)に見るようにB類のレバ節が主節の主語と異なる主語をとっても適格である。

また、A類とB類には含まれる述語部分の要素にも違いが見られる。以下に見るようにナガラ節にはアスペクト要素「ている」は含まれないが、レバ節には含まれる。

(28) *テレビを見ていながらごはんを食べた。

(29) そこで待っていれば、誰かが来るはずです。

主節と異なる主語とアスペクト要素「ている」の出現について、テハ節で検証する。

(30) *太郎は花子が書類を破っては放り投げた。

(31) 太郎は花子が書類を破っては許さないだろう。

(32) *太郎は書類を破っていては放り投げた。

(33) 太郎は花子が書類を破っていては許さないだろう。

(30)～(33)から明らかなように、モノのスコープに入らない条件のテハ節には、主節と異なる主語及びアスペクト要素「ている」が現れるが、モノのスコープに入る非条件のテハ節には、主節と異なる主語も「ている」も現れない。したがって、テハの二つの用法にはA類とB類の副詞節と同様の統語的レベルの違いを認めなければならない。

4.4 焦点、主題、モーダル要素

これまでの観察では、条件のテハ節がA類の副詞節ではないことは証明できたが、B類の副詞節であるかどうかを確かめるにはさらなる統語的テストが必要である。

まず、A類およびB類の副詞節は疑問の焦点になりうるが、それより上位のレベルの副詞節は疑問の焦点にはならない(田窪1987)。

(34) 英語をマスターするために、アメリカに行くんですか。

(35) 山田先生が講演するとき、出席するつもりですか。

(36) *太郎が来るのだから、女らしい格好をするのですか。

(34)の目的を表すタメニ節は、様態のナガラ節同様A類の副詞節であり、疑問の焦点になりうる。(35)のトキ節はB類の副詞節であり、疑問の焦点になっている。一方、(36)のノダカラ節は疑問の焦点にはならず、B類よりも上位の副詞節だと分析される。

疑問詞が生じうる位置は潜在的焦点位置と一致するが、その点についても以下に見るように一貫した分布を示している。

(37) 何をマスターするために、アメリカへ行くんですか。

(38) 誰が講演するとき、出席するつもりですか。

(39) *誰が来るのだから、女らしい格好をするのですか。

また、主題およびモーダル要素は、A類はもちろんB類の副詞節にも現れないが、B類

(46) テハ構文の二つの解釈について

よりも上位の副詞節には現れる。

(40) 太郎は行くかもしれないが、花子がどうするかは知りません。

(41) *太郎は行くかもしれないとき、花子は泣いていました。^{注4}

同様のテストを条件的テハ節について検討してみよう。条件的テハ節は以下にみるように疑問の焦点になりうるし、また節内部に疑問詞も生じうる。

(42) 彼が行っては、問題になるんですか。

(43) 誰が行っては、問題になるんですか。

また、条件的テハ節には主題もモーダル要素も含まれない。

(44) *太郎は行っては、みんなが困るだろう。

(45) *太郎が行くかもしれないくは、みんなが困るだろう。^{注5}

以上の観察をまとめると、次のようになる。

表(1)

	A 類	テハ 非条件	B 類	テハ 条件	C 類
主節と異なる主語	不可	不可	可	可	可
モのスコープ	内	内	外	外	外
アスペクト	不可	不可	可	可	可
疑問の焦点	可	可	可	可	不可
主題	不可	不可	不可	不可	可
モーダル	不可	不可	不可	不可	可

表(1)より、条件的テハ節と非条件的テハ節には、B類とA類の副詞節に見られる構造上のレベルの違いが認められる。

5 テ形構文

この節では、テ形構文の構造と意味を分析し、テハ構文との関係を明らかにしていく。

5.1 テ形構文のさまざまな意味

Hasegawa (1996) などでも指摘されているように、テ形構文の意味はテが連結する節の意味タイプによって決まる。ここで注目すべきは、前件と後件が「行為+行為」を表し、かつ同一主語の場合は因果関係を表さず、行為の連続を表すという点である。

(46) ジョオンは車を預けてすぐに帰った。

「行為+行為」のタイプでも、前件と後件の動作の主体が異なる場合や、前件が行為以外で後件が行為の場合は、テ節が主節の理由に解釈される。

(47) ジョオンが来てビルが帰った。

(48) 給料が安くて転職した。

(49) 友達が事故に遭って病院につれていった。

後件が行為でない場合はいわゆる因果関係を含意する。

- (50) 米が決定的な打撃をうけて危機がせまる。
 (51) 今日は暑くてとても走れない。
 (52) ジョオンが試験にうかって私はとてもうれしい。
 (53) 景気が悪くて失業率があがった。
 (54) ジョオンが車を買ってみんな喜んだ。
 (55) 車を買ってお金がない。

典型的な因果関係とは言えないような関係もあらわしうる。(56)のような対照的(contrastive)な関係、(57)のような設定(setting)である。

- (56) 青信号で人や車は進んで、赤で停止する。
 (57) 日が暮れて雨がふってきた。

5.2 テ節の統語的性質

まず、「主節と異なる主語」という点であるが、行為の連続を表すテ形構文ではテ節が主節と異なる主語をとることはない。

- (58) a 拓也はドアを叩いて大声で叫んだ。
 b *拓也は弟がドアを叩いて大声で叫んだ。

理由、原因、対照、設定のテは、(47)から(57)の例で既に見たように、主節と異なる主語をとりうる。このように行為の連続のテとそれ以外のテの間に統語的性質に違いがあることが予想される。

その予想は「モのスコープ」「アスペクト要素」についてもあてはまる。

- (59) a 拓也はドアを叩いて大声で叫びもした。
 b *拓也はドアを叩いていて大声で叫んだ。
 (60) a 父が高級車を買ってみんな驚いた。
 b 父が高級車を買ってみんな驚きもした。
 c 父が高級車を買っていてみんな驚いた。

(59)aは行為の連続を表すテ形構文の後件の動詞にモを付加した例だが、この文にはモのスコープがテ節に及んだ場合に生じる含意、すなわち「ドアを叩いて大声で叫んだし、裏口に回って様子を探ったりもした」のような解釈を持つ。一方、(60)bの原因を表すテ形構文の後件の動詞にモを付加した例には、モのスコープが後件の動詞句に及ぶ場合に生じる含意はあるが、テ節にまで及んだ場合に生じる含意はない。すなわち「父が高級車を買ってみんな驚いたし、困った」というような含意はあっても、「父が高級車を買ってみんな驚いたし、サラ金に巨額の借金をしてみんな困った」というような含意はない。(59)bと(60)cも対照的で、前者がアスペクト要素「ている」を含まないのに対し、後者は含むことが可能である。

理由、対照、設定のテについても原因のテと同じふるまいを見せる。

(48) テハ構文の二つの解釈について

(61) (理由)

- a 友達が警察につかまって、警察に身元を引き受けに行きもした。
- b 友達が警察につかまっていて、警察に身元を引き受けにいった。

(62) (対照)

- a ??長男が東京に行って、次男はニューヨークに行きもした。
- b 長男は東京に行っていて、次男は家に残っている。

(63) (設定)

- a 暗くなって雨が降りもした。
- b 暗くなっていて、人っ子一人見えなかった。

さらに、原因、理由、対照、設定を比較検討してみると、対照と他の三つの用法との間に統語上の違いが見られる。対照用法のテ節は疑問の焦点にならないが、原因、理由、設定のテ節は疑問の焦点になる。

(64) a *太郎が長崎に行って、次郎は福岡に残ったの？

- b *誰が長崎に行って、次郎は福岡に残ったの？

(65) a 友達が事故に遭って病院に行ったの？

- b 誰が事故に遭って病院に行ったの？

(66) a 先生に叱られてべそをかいているの？

- b 誰に叱られてべそをかいているの？

(67) a 暗くなって帰ったの？

- b 何時になって戻ったの？

対照の用法のテ節は主題やモーダル要素を含むことがあるが、原因、理由、設定のテ節は含まない。

(68) a 太郎は長崎に行って、次郎は福岡に残った。

- b 太郎が長崎に行くかもしれなくて、次郎は福岡に残りました。

(69) a *友達は事故に遭って、ぼくは病院につれていった。

- b *友達が事故に遭ったかもしれなくて、ぼくは病院に行きました。

(70) a *拓也は先生に叱られて、母親は恥をかいた。

- b *拓也が先生に叱られるかもしれなくて、母親は心配になった。

(71) a *外は暗くなって、人っ子一人見えなかった。

- b *暗くなるかもしれなくて、人っ子一人見えませんでした。

以上の観察により、テハの二つの用法の統語的性質は、テ（行為の連続）とテ（原因・理由・設定）にそれぞれ平行的であると結論づけられる。また、対照の用法のテ節はいわゆるB類の副詞節よりも構造的には上位のレベルに属すると言える。

表(2)

	連続	原因・理由 ・設定	対照
主節と異なる主語	不可	可	可
モのスコープ	内	外	外
アスペクト	不可	可	可
疑問の焦点	可	可	不可
主題	不可	不可	可
モーダル	不可	不可	可

6 ハのスコープと機能

6.1 ハのスコープ

まず、次の三つの例の意味の違いに注目したい。

- (72) a お茶を飲んだ
 b お茶は飲んだ。
 c お茶を飲みはした。

(72)bのハは「飲む」の目的語名詞句を、(72)cのハは動詞をそれぞれマークしており、次のような含意がある(益岡 1991)。

- (73) a …が、コーヒーは飲まなかった。
 b …が、お茶をたてはしなかった。
 c …が、映画には行かなかった。

(73)aは「お茶」と別の飲み物(たとえば「コーヒー」)を対比させるという含意、(73)bは「飲む」と別の行為(たとえば「たてる」)を対比させるという含意、そして(73)cは「お茶を飲む」という行為と別の行為(たとえば「映画に行く」)を対比させるという含意である。これらはいずれも当該の行為を別の行為と対比させて捉えるものとしてまとめることができる。

ここで重要なのは、ハが目的語名詞句をマークしている場合にも動詞をマークしている場合にも、その含意には上記の三つの可能性があるという点で、それは動詞句内の付加詞や、補語以外の連用修飾語にハがマークしている場合も同様である。

- (74) a 早くは走った。
 b …が、タイムはとっていない。
 (75) a 鉛筆では書いた。
 b …が清書はしていない。

表層上ハがマークしているのは動詞句内の要素の「早く」や「鉛筆で」であるが、どちらの場合も、「早く走る」、「鉛筆で書く」という行為全体と対比させるような含意をもつ。

このような現象は、動詞句内の要素に付加されたハのスコープが動詞句全体に及ぶと仮

定することにより、説明することができる。ハのスコープに関するこの仮説をテハ構文に拡張すると、先に分析したテハ構文の二類型は、ハのスコープの違いとして捉え直すことができる。すなわち、テハ節がA類の副詞節と同じふるまいをする非条件的テハ文では、ハのスコープはその表層の位置よりも広く、主節の動詞句全体をとる。これを以下のように表示しておこう。

(76) [_{IP} [_{XP} [_{VP} 友達を裏切ってすて] wa] ^{注6} た]

それに対し、テハ節がB類の副詞節と同じふるまいを見せる条件的テハ文の方は、表層上のハの位置とその意味的スコープとが一致している。

(77) [_{XP} [_{IP} 太郎が行って] wa] みんなが困る

このように、テハ構文の二つの解釈が単なる用法上の違いではなく、テハ構文の統語的性質とハのスコープの違いにより区別されるということが示された。さらに意味解釈の違いもその構造に対応させることにより導出できることを次節で示していく。

7 テハ構文の二つの解釈

7.1 XハY構文の意味

「XハY」という構文が「XがYという属性を持っている」あるいは「XにYという述語が与えられる」という意味を持つという点は、特に異論はないと思われる。その意味では「XハY」と「XガY」に違いはない。

しかしながら、ハは、Yがイベント述語(時空間のある一時点に位置づけられる述語)の場合も、Yが属性述語(一時点に限定することなく時空を越えて成り立つ属性を表す述語)場合も現れるが、次に見るように、ガはいわゆる総記の解釈(久野1973)でない限り属性述語とは相性が悪い。

(78) a 太郎は来た。

b 太郎が来た。

(79) a 太郎は親切だ。

b *太郎が親切だ。

(80) 太郎が責任者だ。(総記の解釈)

(80)のような文が発されるのは、たとえば、あるプロジェクトがあって、何人かメンバーがいて、そのうちの誰が責任者かをさがしているような状況である。つまり「プロジェクト参加メンバー」という限定された集合の中での属性として解釈される(有田・田窪1995)。

このようにガは与えられる述語がイベント述語であるか、属性述語であってもその属性の与えられる状況が限定されるような場合にも、その出現が許される。ハにそのような制限はない。

それではハの出現は何によって保証されるのだろうか。

(81) 誰かがいる。

(82) 誰が来たの。

(83) *誰かはいる。

(84) *誰は来たの。

「誰か」「誰」のように指示対象が不定であるような名詞句は、ガによってマークされるが、ハによってはマークされない。これらの名詞句の持つ不定性という意味的性質は、ハの出現を阻止するように働く。

指示対象が不定であることが明示的な名詞句がハでマークされるには、明示的に或いは非明示的に上位の集合を設定する必要がある。その場合、ハの解釈は常に対比的になる (Miyagawa 1987)。

(85) (このメンバーの中の) 誰かは来た (はずだ)。

(86) (このメンバーの中で) 誰は来て、誰は来なかったの。

また、次のように、話し手によって指示対象が同定されていない場合にもハにマークされることはない (田窪 1989)。

(87) A 昨日田中に会ってさあ。

B 田中 {って/*は} 誰だい？

以上の現象から、「Xハ」という形式は、X を特定するのに必要な属性 (「定義的的属性」) を知らなければ使えないということが言える。

したがって、「XハY」構文の持つ意味は次のようにまとめられる。

(88) XハY構文の意味

a Xに述語としてYが与えられる。

b ハがマークされたXは談話において定義的的属性が明らかな対象を表す。

7.2 条件的解釈と非条件的解釈

(88)が名詞句だけでなく、動詞句 (VP)、節 (IP) レベルの言語表現にハがマークされる場合にも適用されると仮定することにより、テハ構文に二つの解釈があること、また、テハ構文に見られるさまざまな現象が説明できる。

まず、(76)のような構造を持つテハ構文が反復的解釈を持つプロセスについて検討する。(76)のハの範囲内にある「友達を裏切ってすて」は、行為連鎖 (action chain) を表す。ハによって選択されたその行為の連鎖は、「た」というテンスによって導入される過去の一定の幅を持った時間 (time interval) が述語として与えられる。その時間の幅の中で行為連鎖が一度きりしかおこらないか、それとも何回もくりかえされるかは、その行為の性質と談話によってきまる。特定の談話の一シーンに位置づけられる行為の連鎖 (の繰り返し) には一般的因果関係は生まれようがなく、条件的解釈には移行しない。

一方、(77)の「太郎が行って」は、因果連鎖 (causal chain) の原因部分を担う事態を表す。ハはその原因的事態を選択し、それに述語として結果的事態である「みんなが困る」が与えられる。それによりテハ構文全体としては、「太郎が行く」という原因が、いわば「属性」として「みんなが困る」という結果を持つことを表す。言いかえれば、「太郎が行く」ということと「みんなが困る」ことが一回性の因果関係ではなく、一般的な因果関係にあるということである。当該の因果関係が一回きりでなく、一般的に成り立つことから、その原因

的事態はその結果的事態をひき起こす「条件」として容易に解釈しなおされる。これがテハの条件的解釈である。^{注7}

7.3 反復性

この節では、冒頭部分で示した非条件的用法の奇妙な例の存在が特に(88)bが動詞句レベルの表現にも適用されることを示しているという点について議論する。

(89) 受付嬢の所へ行っては迷子のふりをしてからかい、親に手を引っ張られて館内を歩いている同年代の子供を片っ端からバカにしまくった。エレベーターに乗っては、各階のボタンを押し、陳列されている高級なシルクのドレスで鼻水をふいた。
(辻仁成『カイのおもちゃ箱』)

(90) 投げては奪三振リーグ最高記録、打っては10試合連続安打、期待の新人の登場です。

(89)では、それぞれのテハ構文が複数の事態を表している必要はなく、「受付嬢のところへ行って迷子のふりをしてからかう」「エレベーターに乗って各階のボタンを押し」のような行為が一回ずつおこったとしても、それがその上位の共通のカテゴリー、すなわち、「デパートでのいたずら行為」に属するということが表されていればよい。この共通するカテゴリーが一つ一つの行為の「定義的屬性」なのである。

その行為の集合は、談話のある特定のシーンを構成しており、決して「一般的」「普遍的」にそのような行為が繰り返される、ということではない。これは、共通のカテゴリーに属する行為の連鎖の集合に、幅を持った特定の時間を属性として与える、というテハ構文の意味とXハY構文の意味によって合成的に導きだされる。

(90)の例も同様の説明ができる。この場合「投げて奪三振リーグ最高記録」「打って10試合連続安打」が「プロ野球における驚異的記録」とも言うべきカテゴリーに属する。この例は、ハの対比的側面が如実に現れている点で、テハ構文におけるハの存在を物語る例として興味深い。

また、次のように習慣的行為を表す例もあるが、これも、与えられる時間の幅が長い場合であって、例外的に扱う必要はない。

(91) あそこは万引きをしては親を悲しませていた。

決して「万引きをする」と「親を悲しませる」とが「一般的」「普遍的」な関係にあることを表しているのではない。

7.4 否定的含意

2節冒頭でも見たように、テハの条件的用法には否定的含意を持たない例も存在する。

(92) あなたのような美しい方に頼まれては悪い気はしない。

(93) こんなに夕焼けが美しくては、明日もいいお天気だろう。

この例と否定的含意を持つ例を比較すると、前件の事態の成立に対する話し手の事実認識に違いがあることがわかる。

(94) 君が行っては、みんなが迷惑する。

(95) 友達を裏切っては、世間が許さない。

(92)の前件は現行の対話の中で実際におこった事態をとりあげており、(93)の場合も現行の対話をとりまく環境をとりあげている。一方(94)の前件は実現していない事態をとりあげているし、(95)も具体的な事態をとりあげているわけではない。

しかしながら、否定的含意の有無は前件が事実的かどうかというだけでは捉えられない。

(96) *先月引っ越しをなさっては、大忙しでしょう。

(97) 中山を交替させては、勢いがなくなる。さりとてカズをおろしては、技術力が落ちる。どうしたらいいんだろう。

(96)の前件は実際におこった事態をとりあげているが、不自然である。(97)はどちらのテハ文の前件も未実現の事態であることは明らかだが、否定的含意があるとは言えない。

さて、否定的含意のない(92)、(93)の文においてテハ節でとりあげられている事態は、単なる事実ではなく、「尋常ではない事態」である。(92)は、否定的な含意はないけれども、「あなたのような美しい方でなければ頼まれてもちっともうれしくなかった」という含みがある。(93)の夕焼けの美しさも同様である。不自然な(96)はテハ節の事態を「尋常ではない事態」として扱っていない。この例も、次のように「尋常ではない事態」として捉えていることを明示的にすると適格な文になる。

(98) あんなにあわてて引っ越ししては、家の中はむちゃくちゃでしょう。

したがって、すでに実現している事態がテハ節に現れる例では、通常と比較して程度が甚だしいという制約が必要で、そこには「対比される通常の状況、事態」が暗黙に前提されていると言える。

未実現の事態を表しているながら否定的含意のない(97)の例でも、二つの事態が対比されており、否定的含意自体も「対比される状況、事態」が前提されているからこそ出てくるのである。典型的な(94)についても、「あなたが行く」という事態と「あなたが行かない」という事態の対比が前提にある。

そのように考えると、否定性よりも対比性の方がテハ構文には必須要素である。対比性を持つ要素同士は共通のカテゴリーに属していなければならないことを考慮すると、非条件のテハ文の反復的含意同様、(88)bの節レベルの表現への適用を物語っている^{注8}。

テハ構文の条件的解釈における対比性が否定性を喚起しやすいのはテ形構文の意味から導きだされる。テ形構文はあらかじめ話し手により何らかの原理が認められている二つの事態(Hasegawa 1995)を表す。その二つの事態は現象的で直接的な関係にあり、認識的あるいは論理的な間接的関係にあるのではない(有田 1996 b)。つまり、テ節の事態が起これば「^{注9}不可避免的に」主節の事態は起こるわけである。Pという事態にとって典型的な対比的事態は¬P(Pの否定)である。¬Pの含みをもっとも効果的に引き出すのは、「Pと不可避免的関係にある結果的事態Qが望ましくない」ということを表すことによってである。不可避免的関係において、望ましくない結果を回避するためには、原因自体を取り除かなければならないというところから、テハ構文に否定的含意が生まれるのである。

2節の冒頭で現象Dとしてあげたように、テハ以外の形式も否定的含意を持つことはあるが、それはハが喚起する「対比性」やテが喚起する「不可避性」が文脈で整えられた場合である。テハ構文では、それが構文的に保証されるために否定的解釈になりやすいのである。

8 まとめ

テハ構文は、テ節の統語的性質、ハのスコープについて以下のように区別されることを論じてきた。

表(3)

	条件的テハ	非条件的テハ
テ節の統語的性質 ハのスコープ	B類の副詞節 テ節のみ	A類の副詞節 テ節+動詞句

テハ構文の二つの解釈は、テ形構文の意味、ハのスコープおよびXハY構文の持つ「Xに述語としてYが与えられる」という意味から導き出される。また、二つの解釈がそれぞれ持つ含意(反復性、否定性)は、ハの持つ「談話において定義的属性が明らかな対象を表す言語表現をマークする」という意味によって引き出される。

本稿の分析は、従来のテハの研究では十分に解決できなかったテハ構文をめぐるさまざまな現象に一貫した説明を与えるだけでなく、名詞句、述語句あるいは節にマークされるハに統一的な意味を提案し、その妥当性を主張するものである。

注1 この点はト文と対照的である。ト文は個別的事態を表す用法だけでなく、つぎのような非個別的事態を表す用法を持つ。

a 友達を裏切ると自分も裏切られた(ものだ)。

b 友達を裏切ると、いつか自分も裏切られる。

aは習慣的事態を表す用法で、行為の主体は特定の人であり、「友達」も「一般に友達」という解釈ではなく、反復的解釈のテハ文と一致する。しかしながら、bの文の行為の主体は「一般に人」であり、「友達」は「一般に友達」のように解釈できる。つまり、非個別的事態を表すト文は、習慣的事態の解釈から普遍的事態の解釈への連続性が認められるという点でテハとは対照的である。

注2 Koizumi 1993では「さえ」を用いた同様のテストで、日本語の副詞節の統語構造上の位置づけを論じているが、自然に解釈しにくい例が多いので、本稿では同じ取り立て助詞である「も」を用いてテストする。

注3 (19)のVPは動詞句を表す略号である。本稿は日本語が階層的な(configurational)言語であり、日本語にも動詞句というレベルを認めるという立場をとる。XPとしたのは、「も」のカテゴリを特定するのを避けた(仮にXとした)ためである。

注4 ただし、「かもしれない」はカラ節には現れるなど、B類として分類される副詞節の中でも細かいところでは違いがある。その点については南(1975, 1993)の詳細な研究を参照されたい。

注5 「かもしれない」という判断を含むには、「太郎が行くかもしれないでは、みんなが困るだろう」のようにデハという形式をとる必要がある。本稿はテハとデハの密接な関係は認めている

が、テハの分析は別の機会に譲る。

注6 IPは、屈折辞(Inflection)を主要部とする句の略号であり、ここでは、便宜的に時制辞「た」が主要部の句をIP(=S(entence))としておく。

注7 なお、節レベルのテ節は、理由や時空設定の意味も持ちうるが、理由が「属性として」行為を持つということや、時空の設定が「属性として」事態を持つということは、結局のところその二つの事態の間に因果性を認めることになる。

注8 塩入(1992)の「話し手の確実な知識を提示する」という特徴づけは、本稿のいう「定義的属性が明らかな」という点に通ずるものと思われる。

注9 よく指摘されているテハ構文の後件に命令文などのような行為要求の表現が現れないというような制約についても、テハ構文の持つ不可避性という性質から必然的に導きだされる。

参考文献

- 有田節子 1992 「日本語の条件と主題の融和について——談話における setting 機能——」『KLS』12
 ———— 1993 「テハ文の構造と意味について——ハの集合照応性——」『国語学会平成五年度秋季大会要旨』
 ———— 1996 a 「ハの domain 設定機能とテハ構文の二つの解釈」『言語探究の領域 小泉保博士古稀記念論文集』大学書林
 ———— 1996 b 「因果の言語学」『言語』第25巻第5号
- 有田節子・田窪行則 1995 「日本語の提題形式の機能について」『人間科学』創刊号 九州大学文学部
- 尾上圭介 1981 「『は』の係助詞性と表現的機能」『国語と国文学』第58巻第5号
- 川端善明 1958 「接続と修飾——「連用」についての序説——」『国語国文』第27巻第5号
- 久野 暉 1973 『日本文法研究』大修館書店
- 塩入すみ 1993 「『テハ』条件文の制約について」『阪大日本語研究』第5号
- 鈴木義和 1993 「テハ条件文について」『親和女子大学紀要』第28号
- 高橋太郎 1983 「構造と機能と意味——動詞の中止形(～シテ)とその転成をめぐって——」『日本語学』第2巻第12号
- 田窪行則 1987 「統語構造と文脈情報」『日本語学』第16巻第5号
 ———— 1989 「名詞句のモダリティ」『日本語のモダリティ』益岡隆志編 くろしお出版
- 田中 寛 1985 「条件表現における提題化機能」『日本語教育』第57号
- 仁田義雄 1995 「シテ節の『ハ』による取り立て」『阪大日本語研究』第7号
- 蓮沼昭子 1987 「条件文における日常的推論——『テハ』と『バ』の選択要因をめぐって——」『国語学』第150集
- 益岡隆志 1991 「取り立ての焦点」『モダリティの文法』くろしお出版
- 益岡隆志・田窪行則 1992 『基礎日本語文法改訂版』くろしお出版
- 松下大三郎 1930 『標準日本口語法』中文館書店
- 南不二男 1974 『現代日本語の構造』大修館書店
 ———— 1993 『現代日本語文法の輪郭』大修館書店
- 森田良行・松木正恵 1989 『日本語表現文型』アルク出版
- Akatsuka, Noriko and Sung-Ock S. Sohn. 1994. Negative conditionality: The case of Japanese -tewa and Korean -taka. In N. Akatsuka (ed.) *Japanese/Korean Linguistics Vol. 4*. Stanford: CSLI.
- Arita, Setsuko. 1997. On the function of the Japanese Particle *wa*: New light on two distinct

uses of the *te-wa* construction. In J. Haig (ed.) *Japanese/Korean Linguistics Vol. 6*. Stanford: CSLI.

Koizumi, Masatoshi. 1993. Modal phrase and adjuncts. In S. Choi (ed.) *Japanese/Korean Linguistics Vol. 3*. Stanford: CSLI.

Kratzer, Angerika. 1995. Stage and individual level predicates. In G. N. Carlson and F. J. Pelletier (eds.) *The generic book*. Chicago: The University of Chicago Press.

Hasegawa, Yoko. 1996. *A study of Japanese clause linkage: The connective TE in Japanese*. Kuroshio Publisher & CSLI.

Miyagawa, Shigeru. 1987. Wa and the WH phrase. In J. Hinds, S. K. Maynard and S. Iwasaki (eds.) *Perspective on topicalization: The case of Japanese "Wa"*. Amsterdam: John Benjamins.

[付記] 本稿は、国語学会平成五年度秋季大会（北海道大学）での口頭発表を大幅に加筆・修正したものである。この間、第6回 Japanese/Korean Linguistics Conference（ハワイ大学）、九州大学言語学研究会、現代日本語学研究会（名古屋大学）をはじめとする学会、研究会などで発表する機会があり、その席上での多くのコメントが改訂のきっかけになった。草稿の段階から詳細にコメントして下さった田窪行則氏、江口正氏、また、改稿の段階で細部にわたってご助言、ご指導いただいた国語学会編集委員の方々に感謝の意を表したい。

——愛知教育大学助教授——

(平成11年2月2日 第1稿受理)

(平成11年8月23日 最終稿受理)